

# ほっとほっとタイムズ—第4号—

2023.6.23

井荻小学校 特別支援教育校内委員

学校でも、プールで歓声が聞こえることとなりました。みなさま。いかがお過ごしでしょうか。先日は、学校公開にたくさんご参加くださり、ありがとうございました。子供たちのうれしそうな顔、誇らしそうな顔が印象的でした。久しぶりに制限のない参観でしたが、その後、お寄せいただいた感想の中で、特に1年生の保護者の方々から、「意欲的に学習に取り組んでいて感心した」、「子供たちのそれぞれ違っていることを認め合う雰囲気の中で安心した」などという声が多く寄せられ、うれしく思いました。その中に、「わが子を信じて見守りたいと思います」という感想があり、ありがたく思いました。簡単なことのように思えますが、実はとても深い中身だと思います。

以前、「子どもの前では、決して人の悪口を言ってはいけない」とよく言われたものです。なぜでしょう。皆さんはどう考えられますか？いくつか理由はありますが、最近、新たに気付いたことがあります。それは、大人の、特に身近で信頼する大人からの悪口を聞いていると、子供たちが委縮してしのびのび育たなくなってしまうということです。子供たちは友達の悪い面だけでなく、よい面もたくさん知っています。それなのに、あんな風に言われるということは、自分も失敗すると否定されてしまうのではと感じて萎縮してしまうのです。感受性の強い子ほどそういう傾向にある気がします。学校の例でいえば、友達が叱られているのを聞くだけで怖くなってしまおうという話を時々聞きます。(学校の場合、響いてほしい子にはまるで響かず、聞かなくてもよい子に強く響いてしまおうといったことがよく起きていつも困るのですが。)子どもは誰も失敗する存在です。できることなら、「大丈夫」と、安心して育ててほしいものですね。誰に対しても寛容な親御さんの子は安心感が強いような気がしています。

他にも、友達や先生など、子供が日常触れ合う人の悪口を大人が口にしてしまうと、相手が悪いのだから自分もこれくらいのことをしていいんだという間違った判断をしてしまうこともあります。子どもには、相手がどうであれ、正しい行動のできる子に育ててほしいですね。そのためにも、言い訳をする隙を与えるのではなく、自分はどうだったのか、自分を振り返り、学ぶ場ができるよう、大人は対応したいものです。

先の話に戻りますが、「子どもを信じる」とはどうすることでしょうか。アンケートの言葉の前には、「学校での様子を知ったことで」とあります。つまり、小学校という新しい環境の中、時には我慢もし、困ったことがあってもそれを乗り越え元気に頑張るわが子の姿を見て、「わが子の自ら伸びる力」を信じて見守ると思ってくださったのです。子どもは自ら伸びる力を持っています。しかし、それを発揮するためには、どんな時でも確実に受け止めてくれる安全基地が必要なのです。そしてそれが家庭だと思のです。重松清さんの小説の中に「親が子供にしてやらないといけないことはたった一つ、悲しさや寂しさを飲み込む海になれ」という言葉が出てきます。素敵な言葉だと思います。

学校公開の後、cs委員でもある山中早稲田大学教授の講演がありました。多くの方が参加していただき、とてもよかったとの感想をいただきましたが、その中で「今、大学の先生を採用するときの一番の条件は学生対応できることです」という言葉にも驚きました。どんなに機械化が進んでも、いや、そういう今だからこそ、自立と共生の力が求められているのだと感じました。

子育てって本当に難しい。でも、また逆に楽しい。私たち大人が、お互いを信じあい、助け合つて、のびのびと子供たちを育てていきましょう。

